最終更新日：2022年10月13日

学校教育講座　**藤崎亜由子** 准教授

子どもの発達と自然との関わり ～保育の場におけるESD～

キーワード　保育内容「環境」/　ヒトと動物の関係学/　虫/　発達心理学/

どのような研究をなぜ行っているか

発達心理学の観点から「ヒトと動物との関係」に関心をもって研究を行ってきました。特に、人間以外の自然生命体との交流がもたらす発達的意義に興味を持ち、都市化された社会における自然体験の喪失が人間の育ちにもたらす影響について関心を寄せてきました。心理学の理論上の問題としては、従来子どもの未熟な認識として否定的に捉えられがちなアニミズムや擬人化を「心の理解」と捉え直して議論を行ってきました。具体的にはイヌやネコなどのペット動物、ウサギやカメなどの学校飼育動物、さらにはロボットなどの疑似生命体に対する子どもたちの関わりや認識について調査を行ってきました。その中で、擬人化という思考および行動様式は、自分たちとは異なる脳をもつ異質な他者とのコミュニケーションを成立させる高度な人間的な振る舞いなのではないかと考えています。現在は、特に虫という身近に現存する「野生」との付き合いのなかで、子どもたちがいかにして生命観や自然観を育むかに関心を寄せています。

現在、都市化やライフスタイルの変化とともに、子どもたちが身近な自然にまみれる経験は少なくなってきています。それは、「体験の消滅 the extinction of experience」とも表現され、自然との直接的で個人的な接触の機会の低下は、自然への関心そのものを喪失させるという悪循環を生み出し、健康上の問題はもとより、生物多様性の保全等に深刻な影響をもたらすと世界的にも危惧されています。そこで、注目したのは子どもたちが日々通う幼稚園や保育所等の園庭です。そこには樹木や草木が植えられ、動物が飼育されています。また、人間の管理下にない虫たちも生息しており、ある園で調査したところ300種を超える虫が見つかりました。このような貴重な教育資源としての園庭を活用しつつ、イベントごとではない日常の自然体験を充実させていけるように、保育教材としてWeb版「奈良女子大学附属幼稚園：園庭のむしあそび図鑑」を開発運営しています。

以上の研究を通して、SDGｓや環境教育などの今日的課題について、保育の場で何ができるのかを具体的に考えて実践へとつなげていきたいと考えています。

研究成果をどのように活用し、どのような貢献ができるか

・現在、世界的にも幼児期の教育の重要性が認識され、SDGsを実現させるための幼児期からのESDが改めて注目を集めています。「環境」「社会・文化」「経済」の３領域を通じて子どもの生活や学びを支える視点は、日本の幼児教育・保育の中に息づいてきた歴史があり、特に戸外遊びや自然とのかかわりを通しての保育は、世界的にも注目に値するものです。地球規模での気候変動や生物多様性の喪失といったマクロな課題を、日常の保育の中に落とし込み、子どもの参画を基盤としながら保育に取り組む方法と技術を保育現場とともに開発していきたいと思っています。

・また、「虫嫌いを緩和し多様な生きものとの共存・共生意識を育む保育実践プログラム開発」を行っています。保育者が養成段階および保育現場で、子どもとともに自然体験を深めて行けるプログラム開発を目指しています。

これまでの連携研究や社会貢献活動の実績

・教員免許状更新講習や学校現場などでの研修
・奈良女子大学附属幼稚園 園庭のむしあそび図鑑（Web版）の開発
・園庭に生息する15種の虫に対する幼児の理解の発達. 保育学研究, 60(1), 91-102.
・臨床発達心理士会兵庫支部役員
・京都国際社会福祉センターのぞみ親子相談室相談員
・公認心理師・臨床発達心理士

奈良教育大学　教育研究支援課 学術研究推進係 0742-27-9135　g-kenkyu@nara-edu.ac.jp